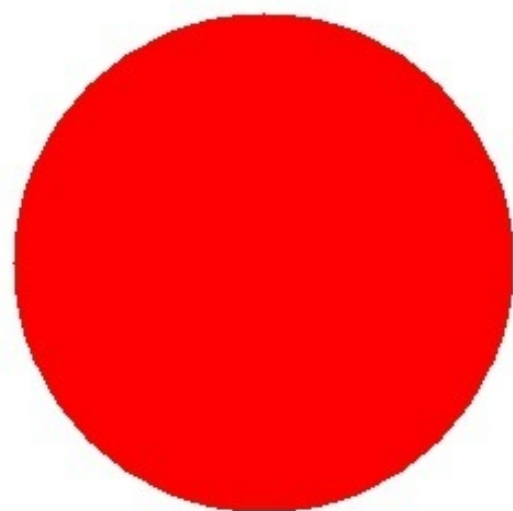
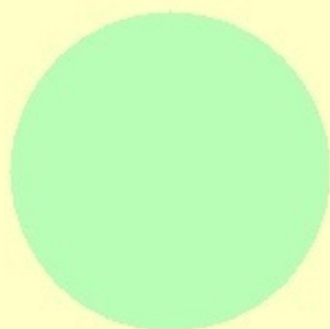


≡ エナ イ ヒカリ

3.11 シリーズ III



咲.

<一日目>

昔ながらの商店街の一角に居を構える、こじんまりとした質屋...は、古びてはいるが、几帳面な店主の手によって、丁寧に磨き上げられていた。

躊躇う客が入店しやすいように、と、身体一つ分開けられた引き戸の隙間から、傾いて、赤く染まり始めた陽の光が差し込む、夏の夕暮れ時.....。

遮られた陽光に、カメラレンズの保護フィルターを拭く手を止めた店主は、上げた視線の先に、汚れた灰色の作業服を見とめ、目を細めた。

小さくめくられた暖簾の隙間から覗く男の視線が、落ち着き無く、店内を物色する。

「ふんっ」

大きく息を吐き出すと、男は、店の中に足を踏み入れた。

ガラスケースに整然と並べられている、流れて売りに出された流質品には目もくれず...男は、店の奥で自分を凝視している店主の、前に立った。

「見てくれ」

店主と男を隔てた、奥行き50センチほどのカウンターの上に、上着のポケットから取り出された布袋の中身が、ジャラジャラッ！と、ぶちまけられた。

.....それはパッと見、値打ちの有る宝飾品の数々...に見えた、が、なんとも...とりとめが無かった。

最新の、ブランドのネックレスに絡まった、古いデザインの指輪。見るからに、安物のブローチの下に、大粒のダイヤのピアスが輝いている。

盗品か.....？

内側に布を張った、接客トレーにそれらの宝飾品を移し、店主は、白髪交じりの髪を掻きあげると、細かい細工物の指輪を、無骨な指先で摘み、ルーペ越しに覗き込んだ。

プラチナの台の内側に"E to T"の文字と、日付が刻まれている。ピジョンブラッドのルビーを、グレードの高い小粒のダイヤモンドで囲んだデザインは、趣味が良い一品、と、言えた。

給料の、三か月分、か....。

これが婚約指輪であれば、新郎は、かなりの高給取りのはずだ。店主は、上目遣いにそ...っと、男の容姿を値踏みする。

年齢は、二十代前半。脱色された髪は、ダラリ...と、片目を覆い隠している。

作業着の袖口には泥が付着し、何に引っ掛けたのか...作業着のそこここに、穴やカギザギが無数に空いていた。その足は、苛立ちを抑えきれずに、細かくリズムを刻んで揺れている...

無理無理無理.....。

後日、警察が、聞き取り調査に来るかもしれない。その時、手がかりになるような特徴...を、この指輪から探し出しておこう...。店主は再度、ルーペを覗き込んだ。

ダイヤの周りの、細かく立てられたツメの間に、粘土のような物が付着しているのが見える。泥に埋まっていた物を掘り起こし、水洗いして持って来た...そんな印象だった。

「この指輪に、鑑別書は.....」

品質の良い宝飾品には、大抵、鑑別書が付けられている。それが婚約指輪であれば、なおさらの事...であった。

店主がさらに、言葉を続けようと顔を上げる、と

「もう、いい！」

トレーの上の品々を鷲掴みにして、乱暴に布袋に放り込むと、男は、きびすを返した。

「くそっ...」小さく舌打ちの音が聞こえ、壊れんばかりの勢いで開けられた引き戸から、男は、小走りに立ち去っていった。

「君、扉を...」

閉めていく、わけが無い、か.....。

少し離れた路上から、咳き込むようなエンジン音が聞こえ、急発進の気配と、微かな排煙の匂いを残して、車が遠ざかっていった。

まったく、礼儀を知らない若造は...

店主は、カウンターを出ると、引き戸を閉めるついでに、よいしょ！と、暖簾を仕舞いこんだ。少し早かったが、今日はもう、店仕舞いにしよう。部屋に戻って、ビールを飲みながら、昨日流れた交換レンズを磨くとするか...

カメラ好きの店主の顔が、ニンマリとほころぶ。手入れが悪く、カビだらけになった品だった...が、上手くクリーニング出来れば、貸し付け金にゼロをプラスして店頭に並べられる程の、それはかなり、希少なレンズであった。

なに、売れなくとも良い。その時は、「俺が、大事に使ってやるから...」

ガラスケースの下にある引き出しから、流質の交換レンズを取り出し、立ち上がろうとした店主の視界に、キラリ！と、小さな光が飛び込んできた。

カウンターの手前、さっきまで、作業服の男が立っていた辺りに”それ”は転がっていた。

拾い上げてみると、派手なデザインの指輪、であった。

小粒のダイヤに囲まれた、カボション・カットのオパールは、かなりの大粒だった...が、台が、

ホワイトゴールドなのを確認した店主は、安価品、と、それを査定した。

覗き込んだルーペを通し、細工の間に付着した、泥が見える。

やはり、あの男が落としていった物、か.....。

「ふっ...」

小さくため息をつく、店主は、カウンターの引き出しの鍵を開けた。

領収書や印鑑の間に混じる、ゼムクリップなどの小物入れに再利用された、複数のフィルムケース...。その中から、空のケースを手に取り、ティッシュに包んだオパール指輪を入れると、再び、引き出しの中に、それは戻されかけ...手が止まる。

引き出しの隅に、剥き出しの、使用済みのフィルムが転がっていた。数日前に行われた、町内会のお祭りの様子を映したフィルム...。その内容の殆んどは、彼が、町内会から頼まれたスナップであった...が、中に数枚、彼が密かに憧れている、近所の女性の浴衣姿...も、写されていた.....。

「現像...出さなきゃな...」

指輪のケースと使用済みフィルムが、隣り通しに並べられ、そっ...と、引き出しは閉じられた。

表のセンサーライトの作動を確かめ、店内の照明を落とした後、ほんのしばらく、店主は、あの、咳き込むような車のエンジン音が聞こえてこないか...と、耳を澄ましてみた。

「あの指輪...明日、現像ついでに、警察に届けておくか...」

カウンターの後ろにある扉を開けて、奥の住居へと、店主は、ゆっくりと歩き出ていった。

<二日目>

フィルムを現像に出し、数時間後、食料品の買出しなどの用事を済ませて、戻ってきた質屋の店主の前に.....

「フィルムに、最初から付いていたキズ、だと思っんですが...」
申し訳無さそうに、青年は、現像の終わったフィルムと、写真の入った袋を差し出した。

隣町にある、そこは、店主の行きつけの写真館だった。

つい最近、息子に代替わりをしていたが、写真の専門校を卒業した青年は、父親と大差ない腕を、持っているように見受けられた。

何より、デジタル処理の知識は今の若者らしく、つねに、最先端のモノを仕入れている。
最近、銀塩カメラのフィルムを、デジタルデータで管理し始めた質屋の店主にとって、この写真館の青年は、良き相談相手...となっていた。

質屋の店主と青年の手で、カウンター兼用のショーケースの硝子の上に、広げられた写真...。その幾枚かの画面の、同じ高さあたり、に...ぼんやりとした、縁のボケた白い光が写り込んでいた。フィルムを灯りに翳すと、なるほど、反転した黒い影が、写真と同じ位置にあるのが見てとれる。

夜景撮影用の、高感度フィルムなのが原因...ではないだろう.....。

「何だろうねえ...」
さりげなく、店主は、例の女性の写真を探す。幸い、それらは、大きなダメージを受けてはいないようであった。

...その写真は、思いのほか、彼女の艶っぽい表情を捉えていて、数秒、彼女の写真の上で視線が留まる。

「あ！その...奥さんの写真！」

青年が、声を上げた。

「奥さんの写真ね、オレ、今日、暇だったんで、デジタル処理して、その白い光...取ってみました〜！！」

デジタル化したフィルムの、画像データを入れたディスクを自慢げに振り回し、「修正済みの画像は、全部のデータの最後の部分に、追加で入れてありますから...サービスですっ！！」と、青年は、小声で質屋の店主に囁いた。

「奥さん」とは、おそらく、リップサービスであろう。被写体が、撮られたことに気付いてい

ない...それは、隠し撮りの匂いが濃厚な数枚...だったのだから.....。

「...ありがとう」

ディスクと、写真の袋を手に、質屋の店主は、こわばった表情で軽く頭を下げ、店を後にした。

町内会の、ウェブサイト用の写真は、管理担当の酒屋の主人に写真を選ばせた後...白い光の写り込みがあれば、デジタル修正かトリミングで対応、するとして...

「あいつ...、彼女の画像でアイコンとか...やってないだろうな.....」

青年の、いつになく浮ついた態度...が、店主の不安を煽っていた。

もし、エロティックなアイコン画像が、ネットにアップされでもしたら.....。

隠し撮りの後ろめたさと、画像流出の不安から、ついついオーバーするスピードを持って余しつつ...店主の車は、傾き始めた陽の光の中...帰路を急いだ。

店舗兼住居の近くに借りた、駐車場に着く頃には...さすがに、店主の頭も冷えていた。

途中、寄り道をして家電量販店で集めた、デジタルカメラのカタログを小脇に挟み、両手に食料品の袋を下げ...質屋の店主は、落ちかけた陽光に照らされた引き戸を、しばしの格闘の末...開錠した。

引き戸に掛けていた”本日休業”の札はそのままに、彼は、店内へと入っていった。

汗に濡れた開襟シャツを脱ぎ、ランニング姿になった店主は、脱いだ服を無造作に、カウンターの上に放った。と...「カラカラッ」...乾いた音が、ポケットからこぼれ出た。

「あ...ちゃ.....」

オパール指輪が入ったフィルムケースが、カウンターの上を、コロコロと転がっていく。

例の写真のことで頭が一杯になり...警察に寄るのを、すっかり、失念していたのだった。

カウンターの上...広げたティッシュに乗った、オパール指輪を前にして...店主は腕を組んだ。何か...彼の、記憶の扉を、内側から引っ掻いていた。

写真に写りこむ、光...

確か.....。

「チェルノ...」

がちやり！名を呼ばれた鍵は、鍵穴に滑り込み...封じられた記憶の扉を解放する。

細く空いた隙間から、禍禍しい爪先が、現れた。

扉の隙間は、溢れ出る記憶の濁流に圧され...みるみる大口を開けた...

新婚旅行だった。妻の希望で、二人は北欧を廻る旅、を、選んでいた。

食事と共に飲んだ強い酒で、ウトウトし始めた彼を、ホテルの部屋に残し...「お土産を探してくるね」と、出かけて行った彼女...

椅子に凭れた彼を、シャワーの音が揺り起こす。

「雨に、降られちゃってさあ～、もお、ずぶ濡れだよお～」

妻のバスローブ姿が新鮮で...彼は、濡れた髪を気に止める余裕もなく、彼女を抱きしめる。

「この...酔っ払い...」

笑いを含んだ妻の声。

手にしたタオルは、彼女の髪的水分を含むことなく...ハラリ、と、床に落ちていった。

この時...放射能を帯びたチェルノブイリからの風が、北欧の地に到達していた、のだが...彼らが事故の詳細な内容を知ったのは、日本に帰国してからのこと、だった...

妻の家系は、癌の罹患...死亡率が高かった。

「引き金に、指が掛かっている」...妻は自分の家系を、そう表現していた。

帰国から数年後、彼女は、癌を発症した。

「引き金...引いちゃった...」

諦めの滲む、か細い声は...病室の枕に、涙と共に吸い込まれた。

彼は、手当たりしだいに情報を求め、問い合わせた。

専門病院、医者、治療法、新薬、民間療法.....

意識して、探したわけではないのだが...チェルノブイリの情報に、触れることも多かった。

放出された放射能は、北半球のほぼ全域を、汚染したこと...。日本の当時の食材からも、汚染が見つかったこと...

事故現場の映像を、テレビで観る機会もあった、が、それらは...残留放射能で感光し、無数の白点で覆われているものが多かった。

「あの時、北欧に行かなければ...」

「帰国後、もっと生活環境に、注意を払っていれば.....」

...そも、あんな事故さえ、起こらなければ.....

詮無い問いかけは、日々弱っていく心と身体を、無慈悲に切り刻んでいく。

担当医は、あらゆる手を尽くしてくれたと思う。それでも...病状の進行は速かった。

妻の死後、酒浸りの日々を通過した後...、知りえた情報のすべてを、彼は、心の奥底に...後悔の念と共に封印...したのだった.....

崩壊しそうになる身体を、カウンターの縁で支え...店主は、呼吸を整えようと、必死に足掻いた

。

陸の上で...溺れそうだ.....。

記憶の波は、怒涛の勢いで、彼を押し潰そうとする。

浅い呼吸を繰り返す、彼の背後から...オパール指輪が、見慣れた男の指に摘みあげられ...店主は、心底驚いた。

空気を入れ替えようと、入り口の引き戸は、開けばなしになっていた。

引き戸からカウンターまで、数メートルの距離。

パニックを起こしているとはいえ...気配を全く感じ取れなかった、なんて.....。

革靴で、Pタイルの床の上を、足音を立てずに歩くのは...かなり難しいんじゃないか...？

とっさに、どうしても良さそうな考えが、店主の心に浮かんだ。

苦笑いが...溜め込んだ息を一気に吐き出させ、呼吸が、楽になった。

「これ、いくらだ？」

オパール指輪を、外の光に翳しながら、ブランドのスーツに身を固めた中年の男が、ダミ声を上げる。

常連...とまではいかないが、時々、流質のブランドバッグや宝飾品を、値切り倒して買っていく彼は、店主にとっては少々、厄介な客、であった。

「それは、売り物では.....」

言いかけて、店主は口をつぐんだ。

「◆万円」

質屋の店主の提示した金額は、おそらく、この指輪の価値の、十分の一以下だと思われた。

当然のように、男は、その金額の半値を口にする。

あっさりとした承した店主に、男は、拍子抜けをしたようだった。

「あ...? ああ.....」

いつもならば、この後、カードで支払えないのか? え? 現金のみ? いまどき、カードが使えない店なんて...と、お決まりのひと悶着が始まるはず、だったのだが...気を削がれた男は、素直に財布から現金を取り出し、店主に手渡した。

店主の気変わりを恐れたのか、領収書を要求することもなく、そそくさと、男は店を後にした。

「はああ〜っ」

大きなため息が、店内に響く。

昨日の作業服の男は、二度と、この店には来ない...。それは、質屋の店主の、長い経験に基づく勘、であった。

もし、警察が来ても、そんな男は知らない...と、言い切ってしまう。

...いや、来店はしたが、何も預けずに出て行った...と、本当のことを言っても、問題は無い

...か.....。

オパール指輪など、最初から無かったのだ。見てないし、触ってもいない。
この日本でも起きた、原子力発電所の炉心溶融と建屋爆破の事故...。
警戒区域での窃盗被害が、後を絶たない...とのニュースが、先日も流れていた、が.....。

係わりたくない.....。

酒屋の主人に、祭りの写真をメールしたら...強めの酒を飲んで、今夜はさっさと寝てしまおう。
酒の力にすぎる日々の、再来の予感...に、彼は、唇を噛んだ。

「かまわないさ、もう.....こんな.....」

店の引き戸の施錠を確かめ、住居に続く扉の取っ手に指をかけた店主、は...背後から
迫る、何者かに怯える逃亡者のように、定まらない視線で振り向いた。

薄闇に青白く浮かんだ彼の顔は、まるで...寄る辺無き亡霊のように、見えた...

<三日目>

「う～れ～し～い～っ！！」

クラブの、きらびやかな店内に...若い女の声が響く。

そう叫びながら、男の腕にしがみついた女の目は、冷静に...渡された指輪の、品定めをしていた。

大粒のオパール、遊色効果に偏りあり、ホワイトゴールドの台、そして、何よりも...

「いや～ん！この指輪、おっきい～っ！！」

こいつ...また、中古品を買ってきやがったな...

しかし...学生のバイトとはいえ、最近は、指名も取れるようになったホステス、である。掛けていた、細いゴールドチェーンのネックレスを外すと、それに指輪を通して、再び、首に掛け直す。

オパールの指輪は、女の...艶やかな胸の谷間に鎮座した。

「今夜は、目一杯サービスするわね～っ！！」

ご満悦の男から、さっそく、新しいボトルの注文が入った。

...さて...、この後の誘いを、どうやって切り抜ける、か...

今夜は...久しぶりに来店する、大口の客の指名が入る予定もあって...明日の大学の講義には、代返を頼んでいた。...だから今夜は、残業OK、アフターOK...

だが...この成金風中年男との深入りを、女は...極力避けていた。

ぼちぼち、鼻薬を嗅がせてやらないと、ヤバイかなあ.....

太ももからスカートの中へと、滑り込もうとする男の手を、ピシャリ！と叩きながら、女は、この席からを離れる算段を、思い巡らせていた。

賑わい始めた店内が、突然、静かになり...数人の男たちを引き連れた、着物姿の老人、が、店の中へと歩を進めてきた。

老人...といっても、足腰はまだしっかりとした、某大手企業の会長、である。

噂では、あっちの方はもう駄目...らしかったが、代わりに、彼の性癖を満足させる手段を、この店の女たちは、十分に心得ていた。

「会長さん！お久しぶりですわあ～！」

チイママが、いそいそと出迎える。

「ひいのふうのみい...と、女の子、十人でいいかしら...」

連れの男たちに二人ずつ、ホステスを割り当て、老人の横にはチイママと、酒に強い、オパールの指輪の女...が、座った。

その席は、緊張した雰囲気にもまれていた。

酒の席を楽しむ...というより、これから一戦始まる...そんな空気だった。特に、初見の男たちの顔は強張り...悲壮感すら漂っている。

ボトルとグラスを乗せたトレイを持つ、ボーイを従え...ママが、短い挨拶を終える。

最初の酒が、ママの手で、小さなグラスに波々と注がれ.....。

男と女たちの、ウォッカの飲み比べ、が、始まった。

女は、自分の部屋のベッドの上で、差し込む陽光に目を覚ました。

酔いの残る浮遊感の中で、昨夜の出来事を思い出そうとする、が...記憶が飛んでいた。

会長の、秘書を名乗る男が...べらぼうに酒に強く、自分と一騎打ちになったことだけ、は...かろうじて覚えていた、が...

...で...その後は.....?まさか...成金男と...この部屋、に...?!

だが、その心配は、マンションの扉の郵便受けに入れられた、この部屋の鍵、と、某会長の秘書の名刺で...簡単に消え失せた。

「昨夜も、札束が山、に、なってたなあ...」

ウォッカのボトルが一本空くたびに、百万円の札束が、テーブルに積まれていくゲーム....。

酔ったふり、を許さない老人は、毎回、吐くか昏倒するまで...若い男女に、とことんまで飲ませ...醜態をさらさせた。

限界まで苦しめて楽しむ...それが、最近の、老人の遊戯...なのであった。

どうやら今回は、会長側の勝ち、だったみたいだなあ....。

どちらにしても、積まれた札束はいつも...迷惑料の名目で、お店の取り分、と...なっていた。

「▼ちゃ〜ん、ゴハンよお〜」

まだ、酔いの残った口調で...女は、愛犬の名前を呼んだ。

ドッグフードを入れた皿を手に、姿の見えない、シーズーを探す。

「まだ、寝てんのかなあ...」

ベッドの足元に、茶色と白色の、斑の毛玉が見えた。

「み〜つけたあ〜♪▼ちゃ〜ん、ゴ・ハ・ン、だよお...」

.....

「...?.....!?!...き...きゃあああ〜〜っ!!」

女のほろ酔い気分は、グツタリと横たわった犬の姿、で...跡形も無く吹っ飛んだ。

抱きかかえたシーズーの口の隙間から、細い、ゴールドチェーンの切れ端が垂れ下がり...陽光にキラキラと揺れている。

ハッとした女は、胸元に手をやった。例の指輪が...無くなっていた...

健康診断やらワクチン接種やら...で、頻繁に通っていた動物病院は、インターホンで女の名前を確認すると、まだ、開院には早い時間にもかかわらず...すんなりと、扉を開けてくれた。

ワイヤーカチューシャで、ざっくりと持ち上げられた獣医の髪は...いつもより、さらにボサボサ感が増して見えた。オシャレ...などではなく、単に、髪の手入れが面倒なだけ、なのだろう。実際、以前、シーズーの定期健診に訪れたときに...診察中、パラパラと目の上に落ちてくる前髪を、鏡も見ずに根元からバッサリ...と、事務用のハサミを使って、獣医が切り落とすのを目撃し...その無頓着さに、度肝を抜かれたこと、を...女は、鮮明に覚えていた。

その後...カットされた前髪部分が、ハゲのように見えて...笑いをこらえるのに、苦労したよなあ...

獣医と看護師が、レントゲン室に移動し...待合室で結果を待つ間に、女は、ふと、そんなことを思い出していた。

次に訪れたとき...獣医の頭は、高校球児のような丸刈りになっていた記憶、が、さらに...女の思い出し笑いを誘う...

撮影が終わり、PCのモニターに表示された、X線の画像を前にして...獣医は、外したメガネのレンズを拭き始めた。

考え事をするときの...それは、彼の癖だった。

まだ三十路過ぎ...にもかかわらず、そんな仕草が彼を、年齢以上に老けて...見せていた。

獣医は、困惑していた...。口から食道にかけての白い線は、ネックレスの影だろう。胃の辺りに見える白い環が、指輪であるのは間違いない。

だが.....白い環の周りには出ている、この、黒い点々は...何だ...?

以前、同じような黒い点が、X線画像に表れたことが、一度だけ...あった。

原因は、空気中を漂い、撮影器具に付着した...微量の放射性物質、だったのだ...が...

メガネを掛け直し、天井を仰ぐと...獣医は、深く息を吸い込んだ。

犬の処置が終わり...女は、診療室兼処置室に、案内された。

指輪とネックレスは、内視鏡を使い、シーズーの腹部から、問題なく取り出されていた。

胃洗浄を済ませ、全身麻酔から醒めたシーズーは...入院用のゲージの中でうずくまり、目だけをキョロキョロと、せわしなく動かしていた。

「この指輪...使われます、か...？」

処置台の上、金属トレイの中に入った...犬の体内から摘出後、丁寧に洗浄された指輪から、視線を移し...獣医は、女に問いかけた。

立場上、行き過ぎた問いなのは...良く解っている。

だが...黒い点の原因を推察した彼には...この事態を、黙って見過ごすことは出来なかった。

獣医の、視線を逸らさぬ目の厳しさに、ただならぬ気配を感じた女は、思わず「い...いえ...、もう...」と、答えを返していた。

もしかして、呪いの...指輪...とか？！

...まさか...ね、そんな、非科学的な.....。

外したメガネのブリッジを、指先で摘まみ、ぷらぷらと揺らしながら、またも考え込んだ獣医の前、で...女は、そっと息をついた。

苦手...というわけではない。こちらの目を凝視して、逸らさぬ彼の視線は...嘘の多い夜の世界を知る彼女にとって、むしろ...心地よくもあった。

彼の、形のよい指先が、メガネの temple を弄ぶ。

...あの指先で、触れて、欲しい.....。

ぼんやりと浮かんだ、自分の思考に気付いた瞬間...女の顔が赤く染まった。

慌てて、獣医の指から、視線を逸らそうとした、そのとき...

両手の指先で摘まんだ temple を、開いたり閉じたり...軽い力で行われていた動作、が...突然、 temple を強引に、左右に大きく広げようとする行為に、変化、した。

...壊れるっ！！

女が、声を上げるより一瞬速く...それまで、使用した処置道具の片付けを、黙々と進めていた看護師が、獣医の手中から、素早くメガネを取り上げ...代わりに、針金ハンガーを、その手の中に押し込んだ。

ぐいっ...！捻じ曲げられたハンガーに、この病院のコート掛けのハンガーが、なんで、ああもデコボコなのか...女は、瞬時に理解した。

獣医の手から取り上げたメガネを、優しく折りたたむと...看護師はそれを、彼の診察衣の胸ポケットに滑り込ませた。それから彼女は、診療机の傍に置いてあるスツールを持ち上げ、女の前に運んで来て、いった。

「先生...あんなっちゃうと、長いですから...。これ、どうぞ...」

中年の、ぽっちゃりとした小柄な女看護師は、犬猫の多頭飼いで、仲間内では有名人なのだと...猫のワクチン接種を受けに来ていた飼い主から、以前、聞いたことがあった。

興味を持った女は、帰宅後、看護師のブログを覗いてみた。

保護動物の、一時預かり所... 『里親募集』の記事が、最初の画面に置かれていた。

...被災動物.....。

被災？あの...震災の...？だってもう、あれから何ヶ月...

しかし、考えてみれば、動物だって数年は生きる。子供も、生まれてくるだろう。

急な避難で、取り残された動物たち...。そんな彼らを訪ね、保護するボランティアに、彼女の家族は協力をしていた。保護した動物の、健康を取り戻させ、各種ワクチン、不妊手術、躰け、里親探し等々...

「乙.....」

女は呟き、ブログを閉じた。

再度、ブログに興味を持つことはなかった、が...病院の、受付の前に置かれた募金箱の中に、気付かれぬようこっそり、と...浄財を入れるのが、それからの...女の習慣になった。

「痛っ...！！」

メガネを掛けるつもり...で、顔面に、針金ハンガーを叩きつけた獣医は...状況が飲み込めず、数秒...固まった。

看護師は、黙々と、開院の準備をしている。

女は...スツールの座席の端を両手で掴み、足を踏ん張って...必死に笑いを堪えていた。

この成り行きを把握した獣医は、胸のポケットからメガネを取り出し、針金ハンガーの修復を試みる。...が、すぐに諦め、折れ曲がったハンガーを、診療机の上に置くと、机の引き出しに、手をかけた。

「気にし過ぎ、かも、知れませんが...」

獣医は、机の引き出しから鉛の板を取り出すと、オパール指輪を、その板で、丁寧に包み始めた。釣りが好きな彼は、自作で、釣りの道具を造るのが趣味、で...鉛の板は、その材料の一つ、で、あった。

鉛の塊に化けた指輪を、封筒に入れる、と...

「これ...放射能測定に出したいのですが...。検査結果によっては、ワンちゃんの治療方針も、変わってくると思います、ので...」

「その検査って、あの...お幾らくらい...」女が聞き返す。

「検査方法によって、差があるか、と...。ただ、ヨウ素やセシウム以外の核種を検査する場合は...万円単位に...なるんじゃないか、な...」

僕個人の興味もありますので、費用は全額、こちら持ちで...と、続けようとした会話、を...マニキュアの指が、乱暴にさらっていった。

「け...検査は！こんなモノを渡した...あの男に受けさせますっ！！」

獣医の手から、奪い取った封筒を握り締め...シーズーの入院手続きを済ませると、深々と頭を下げ、女は、病院を後にした。

封筒を、路上に叩きつけ...渋々と、拾い上げる女の姿を、ブラインドの隙間から見送った獣医は

、再び、メガネを外しかけ...看護師の視線を察知し、手を止めた。

「先生は、ガイガーカウンターをお持ちでしたよね。それで測ってみても...よかったのでは？」
その手があったか！

.....だけ、ど.....

「宝飾品が...ベタホ石みたく反応するとしたら...それは...どれだけ高レベルの、ホットスポット、に.....」

「置かれていたか...ですわ、ね...」

仮定だけでは...夏の怪談話となんら、変わりがない。

手が空いたら、犬の胃洗浄で出た液体と、指輪の洗浄に使った水を、ろ過しておいてくれないか。ろ紙に残った物質を、測定に出してみたいから....

獣医の頼みに、看護師はうなずき、

「ろ過後の液体も、結果が出るまでは、保存しておきますか？」...と、聞き返してきた。
いや、そこまでは...と、いいかけ「お願いします」...獣医は、頭を下げた。

「正しく怖がる.....正しさとは.....なんだ？」

独りごち、て...彼は、放射性物質の体外排出の方法を、ネットで探し始めた。

<ミエナイアシタ>

「放射線何とかの、検査をしろって言われたわよっ！」

投げつけられた封筒を、危うく取り落としそうになりながら、男は、それを両手で受け止めた。彼の事務所が入った自社ビルの前で、出社してくる男を、女が待ち伏せをしていたのは、これが...二回目だった。

前は、クラブのツケの支払い日に、カフェでの待ち合わせをすっぽかした...次の日、だった、か...

「検査が終わるまで、お店には入れないから...ねっ！！」

タクシーを呼び止め、乗り込む女の後姿を、わけも分からず見送る男...に、頭上で勢いよく閉められた窓の音が、追い討ちをかける。

振り仰ぐと、二階の事務所の窓の奥に、専務=妻の、後姿が見えた。

社長の椅子に座った専務=妻は、無言で、男に向かって手のひらを突き出した。

渋々、男はポケットから封筒を取り出し、その手の上に乗せる。

今まで、男が女に贈った宝飾品の数々が、封筒の中から、机の上に転がり出た...

机上の宝飾品を再び封筒に戻し、手元に用意していたバッグに押し込むと、妻は、ホワイトボードの自分の名前の横に、"外回り・直帰"と書き込んで、足早に扉を開け、廊下へと出て行った。

そろそろ十二時になろうか...という時間帯。営業の男たちは、全員、外回りに出ていた。

貸しビルが主業務のこの会社は、男が一代で築いたモノ...だったが、不況のあおりで顧客の転出が相次ぎ、収入はここ数年下がり気味、であった。

...リサイクルショップで、アレを売り飛ばした後、その金で、新しい指輪でも買うんだろくなあ...

ぼんやりと考えながら、社長の椅子に腰を下ろした男の前に、入れたてのお茶が、差し出された。

お茶を運んできた事務員は、最近雇った、妻の親戚の娘...である。

男のお手付きになった、以前の事務員を首にして、妻が替わりに連れて来たのが、まだ子供っぽさが抜けないこの少女...だった。

「なんだあ、これ？」

熱くて濃すぎるお茶の横に、奇妙な塊が、鎮座していた。

少女の細い指が、それを摘み上げる。

「おっも〜いっ！」

何のためらいもなく、少女は、謎の物体の金属製の皮を、剥がしていく。

無骨な鉛の板の中から、オパール指輪の姿を現すと、少女は歓喜の声を上げた、が、それはすぐに、落胆の声音に変わった。

「デカ〜っ！！」

少女は、右手の人差し指に通した指輪を、指先でグルグルと回しながら、眼鏡越しに、男の顔を覗き込んだ。

「おじさんの浮気相手って...男？」

意外な問いかけに、思考停止に陥った彼は、無意識に湯飲みに手を伸ばし、そして...盛大に、緑色の熱湯を口から吹き出した。

「ポポポポ〜ン♪だおー！！」

奇声を発しながら、机の上に撒き散らされた緑の液体を、ティッシュで拭う少女...

その姿を見下ろしながら、男は、なんで熱々の緑茶ばかり出すんだ?!夏の飲み物といえば、よく冷えた麦茶だろうがあ...!!と、怒鳴りかけて...やめた。

どうせ、妻の差し金だろう。帳簿の記入も電話の受け答えもままならない少女を雇う理由は...税金対策と、俺への嫌がらせくらいしかない、のだから...

少女の仕事は現在、部屋の掃除と、管理ソフトへの簡単な数字入力...

だが、空いた時間も机の上で、なにやら熱心に書いている少女の手元を、男は、以前、覗き見たことがあった。

ノート大の紙に書きなぐられた文字と、縦線横線丸描いて...チョン...???

「ネームだよ〜ん！」

歌うように答えた少女は、どうやら、漫画の下描き...のようなモノ、を、書いているらしかった。

「ねえねえ！おじさんは...黒髪メガネと金髪アホ毛の、どっち萌え〜？」

.....意味不明.....。

中年男の目に、少女が...どこか遠くの星から来た宇宙人に見えた瞬間、だった。

十二時を回り、椅子の背に掛けたトートバッグから、カップ麺を取り出して、給湯室へ向かおうとする少女を、男は呼び止め、食事へと誘った。

食事をしながら、漫画のネームを描き進めようと予定していた少女は、一瞬、膨れっ面をしたが、すぐに”社長との豪華な食事”を心に思い描いて...ついて行くことに決めた。

ビルの管理人室に、事務所の鍵を預け、炎天下の街中へと二人は、歩き出した。

途中、近郊のリサイクルショップに寄り、男は、オパール指輪を査定に出してみた。

驚いた事に、指輪には、質屋で購入した金額の、十倍以上の値が付いた。

安物の指輪である事を示し、妻に、いらぬ疑いを吹き込まないように...と、牽制する目的で、食事を名目に少女を連れ出したのだった...が、とんだ、やぶ蛇である。

背後から、興味津々で覗き込む視線に気付いた男は、妻には内緒のお小遣い...と称して◆円を、口止め料として少女に手渡した。

「やたっ！これで次の同人誌、カラーページ増量〜っ！！」

無邪気に喜ぶ少女を横目に、ファミレスでの安い食事を諦めた男は、飛び込みが出来る一流レストランの名前を...記憶の中に探った。

タクシーを止めながら、一瞬、クラブの女の姿が思い出された...が、たった今、手にした現金で、別の店の女を口説く算段に入った男の脳裏には、「検査」の二文字など、微塵も残ってはいなかった。

夕刻...リサイクルショップの前に、少女は立っていた。店頭が目立つ場所に、例の指輪が展示されている。

値札を覗き込みながら、「もうちょっと、おねだりしても良かったかなあ〜」と、手に持ったアイスクャンディーを舐めながら、少女は呟いた。

クラクションの音に振り向くと、待ち合わせ場所の路上に、見慣れない車が停まっている。

「車、替えたんだあ〜？前のより、ボロいんでやんの〜！」

以前の車は借金のカタに消え、でもって、こいつは盗難車...とは言えない少女の彼氏、は...「飽きたんで、売った」と、ぶっきら棒に答えながら、助手席に置かれた布袋を、慌てて、グローブボックスに放り込んだ。

車に乗り込もうと身を屈め、トートバッグを胸の前に持ち直した少女の、バッグの中から、突然、鋭い警報音が鳴り響く。

「え〜！何？なに？！ケータイ？地震速報？！」

少女の手で、バッグから掴み出されたモノは...外国製の放射線測定器、だった。

それは、3.11から一週間ほど経って...やっと、海外の赴任先から、一時帰宅を許された少女の父親が...勤務地で急遽、購入してきた物、だった。

父は、妻と娘に、帰国中...熱心に、海外移住を勧めてきた。

帰国直後に報道された、米軍の、事故原発から半径80キロ圏内立ち入り禁止...のニュースに、危機感を触発された結果、のようだった。

原発の、爆発シーンの映像は、何度もテレビで流れていた、が...

「テレビの人たちは、普通に放送に出てるじゃないの。そんなに危険なら、真っ先に、逃げ出すんじゃないかなあ...？」

地震で、机から落ちて壊れたパソコンから、夏コミ用の漫画原稿のデータが取り出し可能かどうか...が、目下の心配事の娘、と...ガソリンスタンドが在庫切れ、か、長蛇の列で給油ができず、車での外出もままならない...と、嘆く母親.....。

放射能漏れの危険など、遠方の話...と、母娘の二人にはいまいち...実感が湧かない、のであった...

心残りのまま...数日後、父親は赴任先へと戻っていった。

その後しばらくは、移住を促す電話やメールが、毎日のように届いていた、が...やがて、数日置きとなり...最近では、週に一度の電話で、家の様子を聞いてくる程度、になっていた。

父親が、出国した同じ日...横須賀基地で定期修理中だった米空母が、修理を切り上げて、出港した。

事故原発から、300キロは離れているのに、どうして...？

不安になった少女は、父が置いていった放射線測定器のスイッチを入れてみた。

画面には、0.1マイクロシーベルト超えの数値が表示されていた、が...それがどういう意味なのか...少女には解らなかった。

ニュースでは、東北4県で、ハウレンソウとカキナから、暫定基準値超えの放射性物質が検出され、出荷制限...と報じていたが、官房長官は、これを数回口にするだけでは健康に影響はない、と、強調していた。事故原発の2号機と3号機から煙が出て、放射線量が上がったとってたけれど.....海外メディアでは『フクシマ50』と、電力会社の社員らの行動をたたえる報道が、相次いでいた。

ダイジョウブダイジョウブ

雨の滴が、窓を伝っている...

少女は、放射線測定器を、近くにあったトートバッグに放り込むと、その存在を...忘れた。

同じ日、東京では雨やチリなどの降下物の中から、1平方メートル当たり3万ベクレル超えの放射性ヨウ素が、計測されていた...

「うわぁ〜っ！忘れてた！なに？故障？いつスイッチが入ったのお〜！？」

鳴り止まない放射線測定器を持って余し、少女は、それを歩道の植え込みに投げ捨てる、と...車に乗り込み、叫んだ。

「...出して！！」

男の、脱色した髪が揺れ...咳き込むようなエンジン音をたてて、車が、走り出す。

.....やがて訪れる暗闇に、最後の戦いを挑むか...のように、晩夏の夕日に照らされたビル街は、燃えるような紅に、輝いていた.....。

完

<一日目>...の補足

★オパール：宝石の中で、唯一水分を含む（成分中の、約10%）...ということで、放射性物質を、吸着しやすいのでは...と憶測し（間違いの可能性あり）、作品中で、使用しました。

<二日目>...の補足

★銀塩フィルムの被曝感光：実は、「現像前の、ケースに入ったフィルムは、被曝感光するか...」の確認は、取れていません。ネットで色々と検索してみたのですが、「空港のX線で、高感度のフィルムが感光してしまう」及び、「高感度フィルムは、長期間の放射線照射下では、ガラスバッジの代用品となりうる」事くらいしか、情報が拾えませんでした。なので、仮に、被曝感光が起こるとしても、それが、点状なのかハレーション状なのか...不明です。ましてや、たった一晩で被曝感光する、放射線量とは...論外な線量なのではないか...と、推測します。

ですので、文中の出来事は、絶対にありえない、嘘の現象...かもしれません。

★被曝物質の持出し：放射性物質で汚染された物を持ち出せる、合法的な基準値は、現在100,000cpm（2011年9月現在）...だそうです。（これを超えたら除洗します）シーベルト換算で、1ミリ弱（これは、セシウム換算と思われます）になるようです。

1ミリシーベルトって、3.11以前の、1年間の許容量の上限ですよ...。そんなモノを、身近に置いていても大丈夫なのでしょうか...

★★北欧の黒い雨：このシーンは、フィクションです。放射性物質の到達後...北欧（の観光地）に、雨が降ったかどうかの記録は、未調査です。

<三日目>...の補足

★X線画像の被曝感光：3.11以後、コンピュータX線撮影（CR）の画像に、黒い点が認められる...という情報が、関東周辺の医療機関から、相次いで報告されました。この話は、それに基づいています。ただ、「金属に付着した放射性物質を撮影」したときに、どのような画像が現れるのか...については、確認できませんでした。ですので、画像の説明のくだり、は、私の想像に過ぎません。本当は、全く違う画像が映し出される...のかもしれません。

★★ベタホ石：放射能鉱物の一つで、ウランを主成分としている天然石。ガイガーカウンターのテストサンプルとして使用できるようです。

★★ろ過物の放射能測定：Qベク（放射能市民測定室・九州）さんでは、独自開発の『エア・サ

ンプラー』でフィルター（ガラス繊維、GB100R）に捕捉した放射性浮遊物を、NaIシンチレーションにて、計測をしてもらっています。よって、ろ紙の測定も可能ではないかと、判断しました。

<ミエナイアシタ>...の補足

★ポポポ〜ン：某CMの歌の歌詞。放映当時の社会情勢から、トラブルが連鎖して状況が悪化していく...の、ネットスラングとしても使われていました。

★夏コミ：東京国際展示場（東京ビックサイト）で夏に開催される、日本最大の同人誌即売会のこと。

★★米空母：空母ジョージ・ワシントンは、3月21日の午後1時過ぎに、定期修理を途中で切り上げて横須賀基地を出港しました。当初は20日昼頃の出港予定でしたが、直前に延期され、21日朝8時の予定がさらに変更されました。この二度の延期と、20日朝からの3号機格納容器の圧力上昇との関係が、様々な推測を呼びました。

★★0.1マイクロシーベルト超え：3月21～23日の降雨後、関東での放射性物質の濃度が増加しました。

※以下の数値は『J-CASTニュース 2011年4月2日【東京の放射線量 埼玉、神奈川、千葉より高いのはどうしてか】』の記事より、一部転記しました。

◆3月15日 東京 0.809マイクロシーベルト（最大）
※爆発時 埼玉 1.222マイクロシーベルト（最大）

◆3月20日 東京 0.044マイクロシーベルト
22時時点 埼玉 0.059マイクロシーベルト
※降雨前 千葉 0.031マイクロシーベルト

◆※降雨後のピーク

23日1時 東京 0.154マイクロシーベルト
23日2時 埼玉 0.134マイクロシーベルト
22日21時 千葉 0.125マイクロシーベルト

◇※気象庁による降水量：21～23日の合計

東京都で35mm 埼玉県さいたま市で38.5mm 千葉県千葉市で39mm

◆文部科学省による降下物中の放射性ヨウ素の計測値

(採取された雨やちりなどの降下物から、1平方メートル当たり)

◇21日～22日 東京 3万2000ベクレル
※9時～9時 埼玉 2万2000ベクレル
千葉 1万4000ベクレル

◇22日～23日 東京 3万6000ベクレル
埼玉 2万2000ベクレル
千葉 2万2000ベクレル

◇23日～24日 東京 1万3000ベクレル
埼玉 1万6000ベクレル
千葉 3100ベクレル

2011年9月24日記入 ※★★部分は2013年8月14日に追加記入

あとがき、です。

この、「ミエナイヒカリ」の発想の発端は、「殺人トラック」という言葉、でした。
高濃度に、放射性物質で汚染された車が、近所を走り回っているという、噂...

原発の、水素爆発の後、大量の放射性物質が放出されたことは判っていましたから、当然、数日以内には、規制線が張られて、自衛隊なり警察なりが、道路封鎖をしているもの...と、私は思っていました。ところが、どうやらフリーパスらしい.....。

それを知って、真っ先に思ったのが「火事場泥棒」の存在...です。住民が退避した後に、金目の物を狙って入り込み、汚染された物を持ち出して、たとえば、都内のリサイクルショップなどで、換金しているのではないか...？

事実、先日の一時帰宅で、かなりの数の盗難が届け出られたようです。

危険区域にも、当初は出入りが自由だった...。しかも、一時帰宅で、合法的に持ち出しが許可されている放射線の数値も、べらぼうに高い（シーベルト換算で、1ミリ弱？）ので、私は心配です...

さて、最後までのお付き合い、ありがとうございました～（^^）。

3.11以降、考えることが多すぎて、ついつい、思考停止に陥りそうになります。でも、考えること、感じることを諦めたら、そこで人生、終わりかな...と。それはつまり、放射性物質とその拡散...を、受け入れることに繋がりますから.....。

この国（大袈裟ではなく、地球全体）の将来と、子供たちの未来のために、この悪循環を早く止めないと....。

...と、ここまで考えていつも、自分の非力さに落ち込んでしまうのです。

.....ズモ～～ン.....（==；）。

「風が吹くとき」という作品があります。本・映画、共に、私の好きな作品です。初めて本を読んだ時は、その色使い（段々と、トーンが暗く、禍々しくなっていく）に、戦慄しました。丸木さんの、原爆の絵を見た時と、同じ衝撃でした....。

今の日本は、「外に出て深呼吸をし、布袋に入って震えている、作品中の老夫婦」...みたいですね。

ただ、明らかに違うのは、情報を得ようと思えば、その方法がある...という事です。

身近な情報源のTVが、当てにならない以上、自分で動くしか無い、のが難点ですけど....。

2011年9月24日記入

★★★★★★★★★★

あとがき：追記

2011年に、初稿を公開していた某ブログには、「一頁2,000文字まで」の、制限がありました。

ですので、「一日分（一話分）2,000文字×4頁」での、初投稿でした。

今回、パブーさんにて改訂版を公開するに当たり、かなりの量のエピソードの追加を行いました。（「補足」で、★★表示に該当するエピソードが、新規追加の部分です）

それから、本作品では”固有名詞”や”固定数値”を極力使用しませんでした。その理由は、「この出来事は、いつ、どこでも、誰にでも起こりうること」...だと思ったから、です。

...これは、アシタのジブンのコト、かもしれない...

例外は、”チェルノブイリ”や”横須賀港”ですが、これらは、名詞を明記しないと紛らわしい場所が存在し（”スリーマイル”や”佐世保港”）イメージの混乱を招きかねない...と、判断した為です。

ここまでの、長のお付き合い、本当にありがとうございました。

作文資料の検索中に見つけた俳句を、最後に転記します。

ラストシーンの風景は、まさに、こんなイメージで書いています...

紅くして黒き晩夏の日が沈む 山口誓子

2013年8月15日記入

2011年9月23日 第一稿（旧著者名：夏樹）

2013年8月15日 改訂稿（著者名：咲.）

ミエナイヒカリ

<http://p.booklog.jp/book/74901>

著者：咲.

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saki62e81/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74901>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74901>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ